筑前國續風土記 卷之三十目錄

土産考 下

百穀類　菜蔬類　藥品類
果蓏類　衆草類　諸竹類
群花類　海藻類　樹木類
曹桐類

筑前國續風土記 卷之三十

貝原篤信 選定
貝原好古 編錄
竹田定直 校正

土産考 下

○穀　類

【稻】 筑紫米、いにしへより名産とす。就中肥後、筑前の米を佳品とす。飯として香甜なり。酒に釀して味あつし。國中最、上座、夜須を佳品とす。凡稻の品類甚多し。各名有。舉てかぞへ難し。○香稻二種有。味も香もよし。補益の性あり。地をゑらび、且取實すくなきとて、農人多く作らず。中華の書にも如此いへり。

【早米】 國中いづくにもあり。未熟なるをいり、おしひらめて果とす。性あしゝ。病人食ふべからず。凡早稻は性つよくして、病人にいむ。志摩郡波多江

慈姑　烏芋　菱蔆　水萵苣　萍蓬草

右の外猶薬類多し。あげて記し難し。

○薬品類

【鶴虱】　天名精とも云。葉は屋物を治し、折傷をいやす。妙薬なり。見知ておくべし。野にも、林中にも多き物なり。たばこの葉に似たり。其實はくさし。薬とす。

【紅花】　上座、下座、鞍手郡の境圃等に、多く作て利とす。薬とし、紅粉とし、染色とし、其苗若き時は食す。味よし。實は油とす。其用多し。麝香をいむ。べに染の衣服に、麝の氣ふるれば色かはる。

【茯苓】　處々山中より出。秋月の奥江川に多し。白茯苓、堅くして、純白なるを良とす。又茯神あり。

【蓮肉】　蓮は處々の池にあり。紅有。白あり。一處にうゝれば、白きは枯る。多くうゝれば、民用に利あり。蓮根は鐵器をいむ。根、葉、花、實、蕊皆用ふ。蓮蕊は花のしべなり。薬とす。近年唐蓮を多くうゝ。其品亦多し。

【茨實】　處々の池に生ず。鞍手郡植木村の池に尤多し。おにはすと云。實は薬に用ゆ。性よし。又餘となして食す。其實の苞の形、鶏の頭に似たり。故に鶏頭實と云。

【沙參】　處々に多し。葉は杏葉、又は桔梗に似たり。俗にとゝきと稱す。其花小にして、すゝの如し。延喜式太宰府貢物に人參を載たり。然ども今は人參なし。凡延喜式にしるす所の貢薬は、多くは和薬ならん。然らば人參といへるは、沙參なるべし。本草を按ずるに、張潔、古は沙參を以て人參にかへ用ゆ。證類本草に、餘州人參とあるは、沙參なり。是中華にも、沙參を人參と稱す。然ば延喜式に載る所の人參は、倭の沙參なるべきか。凡日本には人參にかへ用る物多し。沙參、羊乳根、委蛇の外はいづれも宜からず。用ゆべからず。ふし人參と云物、此國にも處々多し。味苦くして、性あしゝ。是を用ゆべから

す。近年上方にはやる人參と云物あり。遠江郡白島にあり。木防風也。人參として用ゆべからず。性あしし。

【羊乳根】 是も沙參の別種にて、性も同じ。人參にかへ用ゆべし。處々の山中にあり。蔓人參と云。其花沙參より大にして、つゝがねに似たり。故に又つゝがね人參とも云。本草綱目沙參の條下に見えたり。其蔓紫色にして三葉あり。其ある處、人の手ふれざれども、其香まぎれなし。まことに藥草と云べし。

怡土郡瑞梅寺山に產するは、其根まるし。里にうふれば枯やすし。

【薏苡仁】 葉とし食とす。粥にして食す。葉は茶に加へ煎す。香も性もよし。むねを開き、食をすゝむ。又粒大なるあり。藥とするに堪ず。民俗つらぬきて數珠とす。

【常山】 本草を考ふるに、二種あり。一種はくさぎと云。樹大なり。其葉をほして、賤民是をあつ物とし、あへ物として食す。性よからず。一種は茶の葉に似たり。小木なり。くさし。此一種常山、此地稀也。住吉村邊にあり。二種ともに藥に用ゆ。

【前胡】 野だけと云。山に多し。

【龍膽草】 處々山野にこれあり。秋、瑠璃色の花さく。花もみつべし。りんだうと云。

【牽牛子】 花青、白、紺、赤色々有。其實黑、白有。藥とす。又油とす。一種小あさがほあり。

【蔓荊子】 志摩郡など所々海邊に多し。

【海金沙】 村野に多し。蔓草なり。

【天南星】 二種あり。一種は斑にして、蒟蒻のごとし。一種は芋の葉の光の如し。三にわかる。赤き實有。二種共に用ゆ。冬春の初根を取。毒有。共に林中に在。

【草蘆子】 藥とし、油とす。民用に益あり。毒有。不可食。

【栝樓】 根も核も藥に用ゆ。實の若き時、鹽漬とす。瓜のごとし。核は栝樓仁なり。根をたゝきたる汁、水飛して天花粉とす。餅とし、食して饑饉を助く。

二種あり。一種牛ごうりと云は、性あしく用ゆべからず。玉づさは又別なり。王瓜と云。

【枸杞】から日本二種あり。性すぐれたり。實は藥とす。葉はほしても食す。又茶とす。唐くこ尤よし。和枸杞もからにあり。本草に見えたり。枸杞の皮、地骨皮と云藥なり。

【五加木】根の皮を藥とす。五加皮と云。葉は食す。苦し。性よし。ほしても食す。又茶とす。味甘きもあり。ひめうこきと云。鬼うこきあり。葉大なり。五加皮酒、中風によし。

【防己】つゝらに作り、かづらとし、編のごとくに用ふ。民用を助く。山中に多し。

【冬葵】小あふひと云。其根は藥に用ゆ。花はよからず。又錦葵あり。花紅紫にしてよし。是は藥に用ひず。

【艾葉】處々田野に多し。就中鷲門山に產するをよしとす。伊吹山の產に似て長大なり。凡もぐさは、若き時とるを良とす、と醫書に見えたり。三月三日、尤よし。五月五日にもとるべし。

右の外　當歸　川芎　藁本　地黃　麥門冬　天門冬
山梔子　紫蘇　葛根　荊芥　細辛　香附子　香薷
白扁豆　木通　車前子　玄參　苦參　菖蒲　栢子
茴香　白芥子　商陸　瞿麥　金銀花　白茂　茵陳
紫苑　金佛草　桑白皮　木賊　決明子　益母草
澤蘭　黃精　牛膝等の藥種、みな當國にあり。悉く擧がたし。

○果　蓏　類

【棗】長きとまるきと二種あり。大なるを藥に用ゆ。熟したる時取て、日によく干て後、むして干べし。後にもをり〳〵日に干べし。然らざれば蟲食ふ。熟せざれば性惡し。朝鮮棗は、實大にして茶を入る漆器に似たり。故に其器をなつめといふ。形似たれば也。紹鷗利休等が書る物には、なつめ形といへり。後人は略して只なつめと云。朝鮮棗、今此地にも種を傳へ